

## 大会運営によせて

大会のもち方にについて、三月末に委員諸氏にアンケートをもとめました。その内容については次号にお知らせしますが、その際、研究通信への短信を書いていただきましたので御紹介します。

黒崎 八洲次良

「村落研究の方法」という共通課題には賛成です。村研年報一～五集に掲載された論文のなかから三～四稿をえらび、その方々に方法についてのべていただき。もう一つはこれまでの掲載論稿の方法論上の特徴を要約。整理して類型化する（大へんな仕事だと思いますが）そのような作業のもとに共同討議を行う。もちろん自由課題の報告者や、六集の論稿掲載の方々にも主な討論者になつていただき、などと考えてみました。

当方二月二日～三日まで封鎖さわぎあり、cultural lag (?) かもしれません。小生がまとめた「留寿都村史」公刊されました。宛先は北海道虻田郡留寿都村教育委員会、価格1000円、以上はコマーシャルです。

原 宏

社会の調査が盛んになつております。特に文化人類学はその名称からして一般の人びとの関心をひくようです。村研では大会を通じては社会学、経済学、経済史、社会史の畠の人びとによる交流が多かつたのですが、文化人類学、民族学、民俗学の畠からは名簿上の会員はあっても実質的な会員の出席が皆無に近かったです。それだからというわけでもないでしょが、「動向」欄では登場することはあるても、それもありたりなかつたりで「村落社会研究会」の主なる表玄関からの関心事ではないかの観があるとすれば、お互いのために残念なことだと思います。史学や民俗学の人たちにもっと出てもらおうようなどということは、ずっと前の大会でも希望をのべたはずですが、東京でやる大会などではとくに、地方でもスタッフに恵まれているときには、ぜひ今後考慮すべきだと思います。このよう私の考えは、新入会員として紹介される人たちの所属学会ないし学問的系譜を推測して感じることと無関係ではありません。

話はちがいますが、岩本氏の著書の出版を喜びます。それとともに通信に同氏のおぼえがきが載りましたが、久びさに肩がこらないで参考になるものだったと思います。今後ぜひああいったものを望みます。

最近、故石田英一郎氏の『文化人類学ノート』を読み、日々の考えていたことをのべてみます。文化人類学・民族学・民俗学でも村落